函館西部まちづくりＢＡＲ開催結果（要旨）

■日　　時　令和４年１月１７日（月）１８時～
■場　　所　港の庵（大町８－２６）
■主　　催　函館西部まちづくりＢＡＲ実行委員会，函館市（共催）
※実行委員会メンバー：代表幹事・矢田項一，高田鮎子，柴田英実，谷口真貴，上野愛里

■開催概要

函館市西部地区再整備事業の一環として，公民連携を目指したまちづくり会社が設立されるなど，事業推進が進むなか，こうした動きを西部地区の現場の活動と結び付け，より創造的な実践へ発展させていく場づくりを目指して，このたび，函館西部まちづくりＢＡＲ実行委員会主催（函館市共催）による「函館西部まちづくりＢＡＲ vol.１」が試行開催されました。

まず，本企画の開催趣旨について主催者を代表して，矢田項一代表幹事（株式会社ハコダテミライカモン代表取締役）が説明し，続いて，株式会社はこだて西部まちづく Re-Design の北山代表取締役から西部地区再整備事業および会社概要等の説明があり，その後，コーディネーターの公立はこだて未来大学教授・田柳恵美子氏から，函館市西部地区再整備事業のアドバイザーである株式会社オガール・岡崎正信氏，弘前大学教授・北原啓司氏および深谷宏治氏はじめ様々な活動・活躍を通してまちづくりに貢献している参加者の皆様の紹介がありました。

（矢田代表幹事の挨拶・企画説明）

（まちづく Re-Design 北山代表からの説明）

第１部プログラムでは，西部地区でまちづくりに取り組まれている方をゲストに迎え，お話を伺いました。

はじめにコーディネーターの田柳恵美子氏(公立はこだて未来大学教授／西部地区住人，宝来亭主宰）が，「まちづくりをめぐる時代背景と雑感」として，函館市西部地区のまちづくりの変遷を俯瞰し，明治１２年に造成された「函館公園」に始まり，「バル街」，「はこだて国際民俗芸術祭」に至る，いわば公民連携を先取りしてきたような市民参加型のまちづくりの歴史を振り返って，函館の目に見えないＤＮＡをいかにしてまちづくりに活かしていくか，点ではない「面」としてのまちづくりについて問題提起がありました。

続いて，一人目のゲストスピーカー，富樫雅行氏（合同会社富樫雅行建築設計事務所代表）より「十字街・臥牛館を中心とする建物再生と街角 ＮＥＷ ＣＵＬＴＵＲＥの紹介」として，西部地区での古民家再生の可能性を地域に広めようと，これまで取り組んできた遊休不動産等のリノベーション，なかでも特に最近の取り組みとして，株式会社池見石油店から引き継いだカルチャーセンター臥牛館や旧箱館昆布館など十字街のエリアリノベーションおよび一帯を会場としたポップアップイベント「街角 ＮＥＷ ＣＵＬＴＵＲＥ」が紹介されました。建物再生にあたっての想いを大切に，西部地区だからこそできることを目指した活動について語っていただきました。

次に,「西部地区のコミュニティをめぐる課題と活動の紹介」として，２人目のゲストスピーカー，蒲生寛之氏（蒲生商事常務取締役，箱バル不動産代表，青柳町会長）より，箱バル不動産を仲間と一緒に立ち上げた背景や伝統的建造物を活用した複合施設「大三坂ビルヂング」をはじめとする古民家再生や，函館が観光だけではなく，暮らしを誇れる街にシフトしていくことを目指し，函館旧市街全体を「島」に見立てるというコンセプトで立ち上げた株式会社函館島や，直近の取り組みである大町改良住宅１階のテナント誘致と隣接する市有地を活用した賑わい創出事業，さらに地域社会の基盤である町会の運営などまで，事業者として，また市民・住民としての幅広い活動についての話題提供をいただきました。

（田柳恵美子氏からの話題提供）

（富樫雅行氏からの話題提供）

（蒲生寛之氏からの話題提供）

（矢田項一代表幹事からの総括）

第２部では，「スナック」と称したラウンドテーブル型の分科会を実施しました。「Festival」（地域の賑わい）・「観光劇場」（観光）・「北の流れ者」（暮らし・移住等）・「地主と酒屋」（不動産の利活用等）の４つのテーマ別のテーブルにホスト役を配置し，リラックスできる雰囲気の中で，参加者が６～８人程度のグループに分かれて意見交換を行いました。各グループの主な意見内容については以下のとおりです。

○「Festival」（地域の賑わい）
ホスト役：矢田項一氏，柴田英実氏
西部地区のイベント情報について，その中で一番大きな課題は「情報発信」の仕方であり，大きな情報発信源となる機能が必要と感じる。そこで地域のマネジメント会社である「まちづくり会社」が地域のプラットフォーム的なハブ役となり，地域内外の人に行き届く情報発信を今後は期待したい。また，イベント自体も今までのように，団体単独で開催するのも勿論だが，今後は各団体が垣根を超えて，イベントのコラボや新しく地域に賑わいが起こるような祝祭都市・フェスティバルタウンはこだてならではのイベントを一緒に作っていけたら良いと思うとの意見等々が出された。

○「観光劇場」（観光）
ホスト役：高田鮎子氏，遠藤浩司氏
函館山の夜景など既存観光資源の今と昔の話題から始まり，これからの函館観光が目指すべき方向性として，人に会いに来るまちとして地域とのつながりと地域をつくる関係人口化を加速するべきである。函館には多くの人が集まる観光資源は既にあるので，小さいユニットでそこに集まる少人数の人たちの「豊かさ・幸せ・楽しさ」をつなげるコンテンツの創出が良いのではないかという意見がでた。例えば，元町ホテルの館主は幕末の歴史オタクなので，その人達と幕末について語る会など，今求められているのは，そういう地域ならでは旅をする目的になる観光振興策が求められていると感じている。

○「北の流れ者」（暮らし・移住等）
ホスト役：谷口真貴氏，下沢杏奈氏
函館の暮らしを知るためには，現地を訪れ，自分で体感すること，地域の人と話すことが大切で，それがまちをより好きになるための第一歩などの意見があり，人と人が知り合う、繋ぐような機会や場面の創出が必要である。
暮らしと移住者という目線では，先人が築いてきた歴史や伝統に，いかに触れて函館のことを知り学べるかは重要。そのためには現地を訪れ，見て，触って，味わって，五感をフル回転して感じることが大事。また，歴史や伝統を次世代に残していくかということに加え，その情報を発信し届けることができるような仕組みづくりが今後の課題かと思う。

○「地主と酒屋」（不動産の利活用等）
ホスト役：橋谷秀一氏，菅原雅仁氏
遊休不動産対策の強化として，エリアマネジメント活動の核であるまちづくり会社の動きに期待したい。目に見えるカタチが進めば，その後，民間発意による市街地の民間投資整備が期待できる。まちづくり・まちぐらし活動は，正解のない活動により，地域の様々なステークホルダーを巻き込むため，地域のヒト・モノ・情報を最大限活用する「ローカ

ルファースト」の視点も重要となる。

当日は実行委員やゲストも含めて２８名の有志の方々に参加いただき，終了後の感想として，「様々な視点から西部地区のまちづくりの意見が聞けた」，「もっと西部地区の人の顔・暮らしが見えるまちづくりコンテンツが必要では」，「公民連携の重要性，市民１人１人がまちづくりを考えることの重要性を認識した」，「西部地区再整備事業の取り組みの見える化，地域への情報発信・共有が必要である」，「住民がまちづくりに参画，主役になるまち暮らしの推進」，「遊休不動産対策の利活用推進を進めるべき」，「今後も定期的にこのような会を開催し，地域で活動するまちづくり関係者の情報交換等の場としてほしい」等の意見・感想が寄せられました。

以上